

スプレーギクの挿し穂への冷蔵処理と生育・開花

～冷蔵処理により、初期生育と開花が促進される～

1. はじめに

冬季のスプレーギク生産では、低温による開花の遅れが生じやすく、安定生産の妨げとなっている。輪ギクでは、挿し穂の冷蔵処理により、開花促進につながる事が報告されており、スプレーギクへの適応が期待される。そこで、挿し穂への冷蔵処理が生育・開花に及ぼす影響を調査し、本技術の適応性を検討した。

2. 材料および方法

図1に示す‘ミケール’等8品種を供試した。冷蔵区では、親株からの採穂を2014年9月22日に行い、5℃暗黒条件下で10月17日まで25日間保存した。対照区では、10月16日に採穂し、冷蔵区と同様に保存した。両区とも10月17日に挿し芽を行い、11月5日に定植した。12月5日までは深夜4時間の暗期中断を行い、その後、自然日長条件下で栽培した。栽培温度は、夜間（17時～7時）を最低気温15℃（ただし花芽分化期の12月6日～1月5日は18℃）、昼間（7時～17時）を10℃として管理した。

3. 結果

暗期中断打ち切り時の草丈（初期生育）は、いずれの品種とも対照区に比べて冷蔵区において高くなり、葉数も冷蔵区で増加する傾向にあった（データ省略）。

冷蔵処理で発蕾が促進されたのは、‘レミダス’、‘ダークピンキー’、‘エリートトミーピンク’および‘エリートピンク’で、対照区と比べて2～5日早かった（図1）。その結果、これらの品種では、冷蔵区において開花も早くなった（図2）。一方、‘ミケール’、‘セイプリンス’、‘シルビア’および‘マナドゥー’では、冷蔵処理による促進効果は認められなかった。また、冷蔵処理が切り花の品質に及ぼす影響は認められず、いずれの品種とも対照区と同等の品質となった（データ省略）。

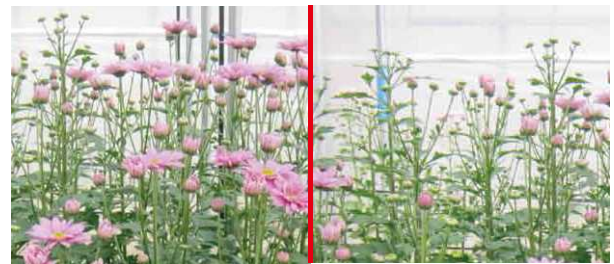


図2 挿し穂への冷蔵処理が開花に及ぼす影響
(左：冷蔵、右：対照、品種はエリートピンク)

4. おわりに

以上のことから、スプレーギクの挿し穂への冷蔵処理により、初期生育と開花が促進されることが明らかとなった。ただし、開花促進効果が認められない品種も存在したため、品種特性を考慮して技術の適用を図る必要がある。

(栽培部 島 浩二)

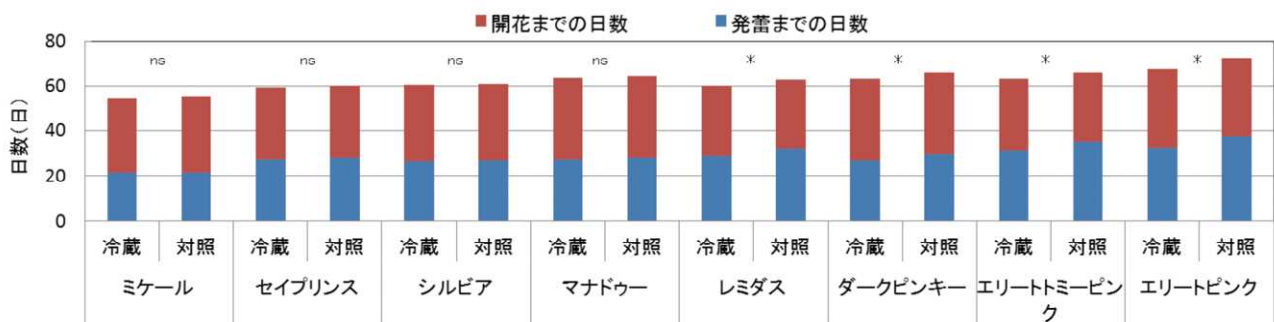


図1 挿し穂への冷蔵処理が発蕾と開花に及ぼす影響
(t検定において5%レベルで、*は有意差あり、nsは有意差なし)